

Jリーグに所属する在日朝鮮人の民族意識

千葉 直 樹

Ethnic Identities of “Japanese-born” Korean Players in the Japanese Professional Soccer League

Naoki Chiba

Abstract

This study seeks to understand the nature and complexity of the ethnic identities of “Japanese-born” Korean players who belonged to teams in the Japanese Professional Soccer League. The study involves individual one-hour semi-structured interviews with two Korean players in Japan.

The results indicate that two players go to North Korean schools in Japan and maintain strong pride in their ethnicity. In particular, it is clear that a graduate in Korea University express their ethnic prides strongly. They aimed at belonging to the North Korea team. However, the other player refused to belong to the national team before, because he intended to accept an offer to become representative in the South Korea team. There are Korean soccer players in Japan that wish to become national representatives in three countries (North/South Korea and Japan). Thus, it is clear that the ethnic identities of Japanese-born Korean players are diverse.

Key words: “Japanese-born” Korean, soccer, ethnic identities, globalization

I. はじめに

朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）のサッカー代表チームは、44年ぶりにワールドカップ・南アフリカ大会に出場した。主力選手のなかには、日本で生まれ育ち、Jリーグで活躍した、鄭大世（ドイツ・ボーフム）と安英学（大宮アルディージャ）という2名の在日朝鮮人が含まれていた。彼らは、在籍期間は異なるものの、ともに朝鮮学校でサッカーを経験した者である。

1990年代まで、朝鮮学校出身のサッカー選手は、北朝鮮代表チームに選抜されることを目標にしていた。しかしながら、近年は様相を異にしている。たとえば、同じ朝鮮学校出身の朴康造（ヴィッセル神戸）は、韓国Kリーグの城南一和に所属し、シドニー五輪の大韓民国（以下、韓国）代表チームに選抜された（崔，2002）。また、2011年のアジアカップの決勝戦で、日本代表チームの一員として活躍し、一躍時の人となった李忠成（サンフレッチェ広島）は、2007年2月に日本国籍を取得している¹⁾。

日本で生まれ育ち、かつ朝鮮学校でのサッカー経験を持ちながら、彼らはいかにして特定の国家への帰属意識や民族意識を形成したのだろうか。

在日の呼称には、「在日朝鮮人」、「在日韓国・朝鮮人」、「在日コリアン」などがある。これらの呼称にはいくつかの問題点がある²⁾。ここでは1910年の日韓併合以降、日本に定住する朝鮮半島出身者やその子孫、日本国籍を保有する韓国・朝鮮系の人々を、広義に「在日コリアン」と呼ぶことにする。一方で、本研究で対象とした在日Jリーガーは、日本人研究者である筆者に対して、自らを「在日朝鮮人」と自認していた。このことから、彼ら自身の語りに関する部分では「在日朝鮮人」と表記し、在日韓国人や日本国籍を取得した在日を含む場合には、「在日コリアン」と呼称を使い分けることにする。

在日コリアンは、芸能界や経済界のみならずスポーツ界でも活躍してきた（朴，2005）。しかし、活躍したといわれる彼らは、日本社会において誰もが知っているがら本当はあまり知られていない、不可視な存在（野村，1996）であった。スポーツに限ってみても、プロ野球の

金田正一や張本勲のように、自らの民族的出自を公表してきた者は稀である。たとえば、戦後間もない時期に人気を博した力道山でさえ、死ぬまで朝鮮人であることを公表しなかったように、多くの在日コリアンのスポーツ選手は、通名でプレーする不可視な存在である。サッカー界でも、在日朝鮮蹴球団というチームが1960年代から70年代にかけて、日本リーグのチームを相手にしても無敵の強さを誇り、北朝鮮の代表チームに、少なくとも7選手を送り出してきたといわれる(野村, 1996)。しかし、これもまた不可視な存在で、こうしたチームが存在したことを知る者は少ない。

これまで社会学や文化人類学の分野で、在日コリアンに関する問題は研究されてきた(鄭, 2001; 福岡, 1993; 原尻, 1997; 金, 1999; リャン, 2005; 尹, 2001)。これらの研究は、在日コリアンと日本人研究者両方の立場から、在日コリアンの歴史的背景、民族差別、複雑な民族意識などの問題を明らかにしてきた。

一方でカルチュラル・スタディーズでは、サッカーとポストコロニアルな社会の関係についていくつかの研究が行われてきた(有元・小笠原, 2005)。有元は、大英帝国の植民地主義の結果として、サッカーが世界中に普及した歴史を振り返るなかで、「サッカーの自己形成は植民地主義と切り離すことができない」(有元, 2005, 23頁)と指摘している³⁾。サッカーは世界中に普及する過程において、植民地のイングランド人の占有物から、植民者の権力に抵抗する手段として、ナショナル・アイデンティティや民族意識を形成・強化する役割を担うようになった(Archetti, 1994; デイメオ, 2005)。

朝鮮半島においても、サッカーは特別な民族スポーツとして発展し、日本の植民地支配に対する抵抗の手段として機能した時期があった(野村, 1996)。在日コリアンは、まさに植民地支配の結果として生み出された人々であり、彼らの生活はポストコロニアルな状況におかれている。在日コリアンはディアスポラと呼ばれることもあり、民族的起源を持つ国にも、在住する国にも完全に帰属できない立場に置かれている。ポストコロニアルな日本社会において、サッカーはプロ選手と一般の在日コリアンにとってどのような役割を果たしているのだろうか。

欧米のスポーツ社会学では、民族や移民とスポーツの関係に関して研究が行われてきた(Frogner, 1985; Darby, 2007)。特にスポーツ労働移住という研究領域において、外国出身スポーツ選手の移住動機や文化的な経験に関して焦点があてられてきた(Bale and Maguire, 1994; Lanfranchi and Taylor, 2001; Stead and Maguire, 2000)。スポーツ選手のナショナル・アイデンティティへの関心は高いが、多くの場合、特定のスポーツ選手に関するメディア報道を通じたテキスト分析を行う研究がほとんどである(Andrew, 1996; Jackson, 1998)。したがって、移民の子孫や帰化したスポーツ選手がどのようなナショナル・アイデンティティを保持しているかに関して、インタビュー調査を行って探求する研究はほとんど行われ

ていない。

体育・スポーツ社会学の分野では、黄(2007)と鈴木(2008)の研究を除いて、在日コリアンとスポーツに関する研究が十分に行われてこなかった。黄(2007)は、2006年のワールドカップ・ドイツ大会をテレビ観戦した、在日韓国人や韓国人への質問紙調査や参与観察を通して、グローバルな多角的な応援世界について報告した。鈴木(2008)は、在日一世の朝鮮人女性を対象としてインタビュー調査を行い、孫基禎と力道山に関するスポーツの記憶という視点を通して、在日女性のライフストーリーを明らかにした。

一方で、スポーツライターなどのジャーナリストは、在日コリアンのスポーツ選手について著書を出版してきた(康, 2001; 野村, 1996; 崔, 2002; 矢野, 1995; 慎, 2010)。しかし、これらの著書は、在日コリアンの有名スポーツ選手の伝記や、在日スポーツ界の課題に焦点をあてる内容であり、慎(2010)の作品以外、彼らの民族意識を十分に明らかにしてこなかった。

これまで体育・スポーツ社会学の研究分野では、在日コリアンとスポーツに関する問題を扱うことがある種のタブー(禁忌)であった。結果として、一般のスポーツ関係者に在日コリアンに関する問題が十分に認識されず、彼らに関する偏見や差別が存続する状況が日本スポーツ界には残っている⁴⁾。本研究の意義は、在日朝鮮人Jリーガーの民族意識を明らかにすることを通して、彼らに関する偏見を和らげ、マイノリティのスポーツ選手に関する理解を深めることである。さらに、グローバル化する社会のなかで、スポーツ選手も海外で活動することが昨今では珍しくなくなった。一流競技者のなかには、オリンピックやワールドカップに出場するために、国籍を変更する選手も出てきている⁵⁾。こうした時代背景において、在日朝鮮人のサッカー選手はどのような民族意識を持ち、どのような国家の代表チームに帰属意識を持つかについて、本研究では焦点を絞る。

本研究では、生活経験やサッカー経歴との関わりのなかで、インタビュー調査時点における在日朝鮮人のプロサッカー選手の民族意識を明らかにすることを目的とする。ここでは、ある人が特定の民族集団の一員であるという意識を持っていることを、民族意識と定義する。特に国家代表チームの選択に際して、サッカー選手としての成功と民族意識がどのように関係するかについて探求する。

II. 研究方法

(1) 調査方法

本研究では、2006年3月から2007年3月にかけて、在日朝鮮人のJリーグ経験者5名にインタビュー調査(面接質問法)を各1時間程度行った⁶⁾。この論文では、北朝鮮代表経験のある2名の選手の事例を抽出して分析を行う。なお、2006年にJ1とJ2に登録された在日コリ

アンは10名であった(日刊スポーツ社編, 2006)。これは姓名や出身学校名から在日コリアンと確認された選手数であり、民族的出自を公表していない在日Jリーガーの数は不明である。

本研究では、調査対象者が現役のプロサッカー選手であったことから、長時間にわたるインタビュー調査が難しい状況にあった。したがって、インタビュー時における民族意識とサッカーに関わる問題に焦点を絞り、解釈的客観主義アプローチ⁷⁾(桜井, 2002)を参考にしてインタビュー調査を行った。選手の経歴などをできる限り調べ、事前に質問項目をある程度用意したが、話が展開していくなかで、それ以外に選手自身にとって意味ある出来事も語られるよう心掛けた。質問の内容は、家族構成や生育地域への愛着、サッカー経歴、朝鮮学校におけるサッカーの位置づけ、目標にする国家代表チーム、民族意識についてであった。

(2) インタビュー回答者の属性

本研究では、インタビュー回答者2名のプライバシーを考慮して、選手名を仮名(金昌守と白泰栄)で表記する。調査対象者は、インタビューを行った時点で20代の現役選手であり、在日三世であった。前者は小学校から大学まで、後者は高校まで朝鮮学校に通い、民族教育を受けており、通名をほとんど使わず本名で生活してきた。金昌守は韓国籍を保有している一方で、白泰栄は朝鮮籍を保持していた⁸⁾。金昌守は朝鮮大学校を卒業してからJリーグで活躍した一方で、白泰栄は日本の大学を卒業した後、Jリーグのクラブとプロ契約を結び活躍を認められた。両者とも北朝鮮のサッカー代表チームに選抜された経歴がある。

(3) 研究の理論的な枠組みと在日コリアンの七つの類型

本研究は、アメリカの社会心理学者、ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論を理論的な枠組みとして用いて、インタビュー調査を行った(ブルーマー, 1991)。シンボリック相互作用論の三つの前提は、1)「人間は、物事が自分に対して持つ意味にのっとって、そのものごとに対して行為する」、2)「このようなものごとの意味は、個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され、発生する」、3)「このような意味は、個人が、自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正されたりする」(ブルーマー, 1991: 2頁)、である。つまり、ブルーマーは、人間の行動が他者との相互作用のなかで生み出されており、研究対象者にとっての行動の意味を大切にすべきであると考えていた。したがって、本研究では、研究対象者の認識や感じ方をありのままに記述するという姿勢で、インタビュー調査を行った。

社会学者の福岡安則は、在日若者世代にインタビュー調査を行い、彼ら/彼女らのエスニック・アイデンティティに応じた類型枠組みを作成した(福岡, 1993; 福岡・

金, 1997)。福岡(1993)は、在日一世と二世の世代に比べて、日本社会に支障なく適応しているといわれる在日三世の世代が、多様な民族意識を持ち、アイデンティティの葛藤を経験していると指摘した。つまり、在日若者世代は、強い民族意識を持つタイプと、「日本人化」されていくタイプというように単純に二項対立で説明できる訳ではなく、極めて多様で個性的なアイデンティティを持つ人が多かった、ということである。福岡は、Hutnik(1986)のエスニック・アイデンティティに関する類型枠組みを参考にして、在日若者世代を、「祖国志向型」、「同胞志向型」、「共生志向型」、「個人志向型」、「帰化志向型」、「葛藤回避型」、「葛藤型」と七つに分類した(福岡, 1993; 福岡・金, 1997)。なお、この調査では、日本生まれで韓国籍を持つ18歳から30歳までの者を対象としており、在日本大韓民国民団(以下、民団)の傘下団体の名簿に基づいてサンプリングがなされた。以下、七つの類型について説明する。

「祖国志向型」の人々は、小学校から高校・大学まで、在日本朝鮮人総聯合会(以下、総聯)系の朝鮮学校の出身者が多く、民族教育を通して民族の誇りを強く持つ。彼ら/彼女らは、子どもの頃から在日朝鮮人に囲まれて生活してきており、アイデンティティの葛藤を経験していない。このタイプの中心命題は在外公民である。つまり、日本に居住していながらも、朝鮮人としての意識を持ち、将来の祖国統一に貢献するためにも、在日同胞社会を維持・発展させなければいけないと考えている。「祖国志向型」は、通名をほとんど使わず、民族名を一つだけ持ち、祖国も自分の国も一つの朝鮮であるとする(福岡, 1993)。

「同胞志向型」は、民団傘下の「在日本大韓民国青年会」に結集する若者が分類され、在日同胞のために「権益擁護」や「処遇改善」を勝ち取る活動をしている。「共生志向型」は、生まれ育った地域社会への愛着が強く、在日コリアンへの差別を日本社会の変革によって変えて行こうとする人々である。「個人志向型」は、七タイプのなかで最も学歴の達成水準が高く、個人的成功を追及し、在日の友人は少ないと指摘されている(福岡・金, 1997)。

「帰化志向型」は、子どもの頃から日本の学校に通い、自分の家族以外日本人ばかりという環境で育ち、民族的出自を隠しながら生きてきた場合が多い。彼らの中心命題は、日本人になる、であり、実際に日本国籍を取得した者が多い。彼らは通名を子どもの頃から使っており、民族名には愛着を持っていない場合が多い(福岡, 1993)。

「葛藤回避型」は、日本人と過す時は、日本人と変わらないという意識になり、韓国人の友人と接する時は韓国人としての意識になるというように、その場に応じて適応する能力を身につけた若者である。彼らは深刻なアイデンティティの葛藤を経験していない(福岡・金, 1997)。「葛藤型」は、「・『在日』として生まれ育ってくる過程で、自分は日本人ともいいきれず、かといって韓国人(朝鮮人)ともいいきれずというかたちで、そもそも自

分はいったい何者なのかというアイデンティティの葛藤を体験し、今後の自分自身の生き方を明確にできないでいる青年たちである」(福岡・金, 1997: 133頁)と説明されている。

福岡(1993)は、現実適合性を優先させて各タイプの特徴を取りだす形で類型枠組みを作成した。したがって、個々の在日コリアンが正確に類型にあてはまる訳ではないことを指摘している。さらに、七つの類型は民団に所属する韓国籍の人々への調査に基づき作成されたものであり、本研究で対象とする総聯系の在日朝鮮人に正確にあてはまらない部分がある。ともあれ、本研究では、福岡の作成した在日若者世代に関する類型枠組みを参考にする。

Ⅲ. 結果及び考察

1-1) 事例1: 金 昌守

金昌守は、愛知県名古屋で1984年に生まれた在日三世である。インタビューは、金が朝鮮大学校を3月に卒業し、J1のクラブに入団して間もない時期(2006年3月16日)に行われた。金は、小学校から大学まで朝鮮学校で学び、Jリーガーになった選手であった。

金は、朝鮮学校で民族教育を受け、在日社会のために貢献したいと考えており、北朝鮮代表チームに入ることを熱望していた。しかし、日本の国籍法は1985年まで父系血統主義を採用していたことから、父親が韓国籍であった金昌守の国籍も韓国籍になった。日本政府は、北朝鮮との間に正式な国交が結ばれていないことから、在日朝鮮人の「北朝鮮国籍」を正式に認めておらず、外国人登録の国籍欄が「朝鮮」である場合には地域を示しているにすぎないという見解である。そのために「朝鮮籍」から韓国籍に一度国籍を変更した場合には、正式な国籍ではない「朝鮮籍」への変更を日本政府は認めていない(金山, 2001)。国籍を朝鮮に戻すことは法律上困難であった。その時の心情を次のように述べた。

「それと代表問題もあったんで、代表になるために朝鮮に変えようと思ったし、まあ高校生のときからもうずっと、自分は朝鮮学校って北朝鮮系⁹⁾じゃないですか。そういうので北朝鮮のこの優越性とかそういうのを習ってきて、こう敬っているのに、自分の国籍が韓国なのにそういう喜べないというそういう矛盾を自分の中で感じていたんですよ。だから、もうそういうのもあるし、代表問題もあるし、だから、今はもう韓国にしといた方が安全だっていうけど、僕はそういうのに逆らって、逆に朝鮮の方に変えようという風に時代の流れとは逆流してやろうとしていました。それを自分で誇りに思いますし、そうやっていることになんていうのかな、悪い点というのは見つからないし、マイナスはあるけどそれ以上にマイナスに打ち勝つぐらいの意気込みもあった

んで。」

金は「北朝鮮系」の朝鮮学校で教育を受けてきており、北朝鮮の代表としてプレーすることに意義を見出していた。そのため韓国籍の金は、永住権の申請や海外渡航手続きにおいて不利になる朝鮮籍を取得しようとした。しかし、前述したように韓国籍から朝鮮籍への変更は不可能であった。そこで在日朝鮮人蹴球協会は、北朝鮮政府に働きかけ、金昌守のパスポートを発行させ、国際サッカー連盟(FIFA)に在日朝鮮人の歴史的経緯を説明し、金の出場許可を懇願した。結果的に金昌守は、2007年の東アジア選手権大会から北朝鮮代表としてプレーすることができた。

ワールドカップ・ドイツ大会のアジア地区最終予選(2005)に、北朝鮮代表として出場した在日朝鮮人の安英学と李漢宰について尋ねると、次のように答えた。

「実は、それに僕も行く予定だったんですよ。だけどその国籍の問題に引っかかって、それで結局駄目で、いけなかったんですよ。2月9日の日本戦¹⁰⁾の時に、埼玉に見に行ったら、僕、大学の人みんなで行った、生徒みんなで行ったんですけど、そのときすごい悔しかったですね。悔しくはないけど、なんていうんだろう。歯がゆかったというか、やるせなかったというか、自分もこの舞台に立ちたいというのはすごい強く思いました。」

金は、代表チームに選ばれる実力があがりながら、国籍の問題で試合に出場できず、歯がゆい思いをしていた。彼に「朴康造選手の活躍を見て韓国代表チームを目指そうとは思いませんか」と聞くと、まったく考えられない、と答え、その理由を次のように述べた。

「朝鮮系なんで、なんか裏切りじゃないですか。何となく同じ国、同じ民族でもやっぱり国は違うんで、そっちと意義が違うんで、朝鮮代表ででると韓国代表っていうのはだいぶ違う。」

つまり、金は総聯系の在日社会のために貢献したいと考えており、韓国代表ではなく北朝鮮代表に選出されることに意義を見出していた。

1-2) 家庭での躰と朝鮮学校での経験

金昌守はどのように「総聯系」の在日朝鮮人になっていったのだろうか。家庭での躰について尋ねると、金は次のように答えた。

「やっぱりお父さん厳しかったですね。はい。いややっぱあんまりものを多く喋らないんですよ。言葉を多く発しないんで、お父さんはやっぱ朝鮮系のお父さんというのは、男らしいというか、そういう威

厳のあるお父さんが一杯いるんで、その典型的な朝鮮人のおやじで、俺のお父さんは、徹底的にそういうのは躰られました。食卓の礼儀から、挨拶とかも全て叩き込まれました。殴られながら」

金昌守は父親から厳しく躰けられたと述べており、こうした家庭環境が金の民族意識の形成において多大な影響を及ぼしたと考えられる。また他の在日朝鮮人と同様に、金は親の意向を受けて朝鮮学校に進学することになった。

「100%親の意向です。うちのお父さんはどっちかという日本学校で育ってきたんで、お父さんは、だから日本学校に入れようとしたんですけど、お母さんがバリバリの朝鮮系なんで、何があっても、子どもを生んだら母親の方が強いじゃないですか。だからもう強引に朝鮮学校に入れ【させられ】ました。」

金の場合には、日本の学校に進みたいという考えは生まれなかった。金は、大学進学時においても日本の大学から勧誘を受けていたが、朝鮮大学校に進学した。金は、日本でプロのサッカー選手になるためには、関東や関西の有力大学に進学することが近道であることを認識したうえで、あえてサッカーの競技環境が整っていない朝鮮大学校を選び、その中からプロ選手になることに意義を見出していた。

金は、Jリーグの外国籍特別枠¹¹⁾という1チーム1名の枠に入るために、朝鮮学校以外に通信制の学校で日本の高校卒業資格を取得していた。金は朝鮮学校が日本の学校と同じレベルの教育内容を備えているにもかかわらず、日本の学校として認められない現状に対して憤りを抱いており、就職に際しても、在日朝鮮人の学生が最初から日本企業への就職を諦めてしまう状況について嘆いていた。

1-3) 在日朝鮮人にとってのサッカー

金は、男ならサッカーをするのが当然という朝鮮学校で育ち、当たり前のようにサッカーを始めた。

「朝鮮学校っていうのは、まあ朝鮮の朝鮮民主主義人民共和国の国技がサッカーなんですよ¹²⁾。だからそういうので日本の朝鮮学校のどの学校でもサッカーしかなくて。小学校はそうですね。サッカーと後は何か芸術系がちょっとあるくらいで、だからサッカーやって当たり前で、サッカーやらない奴はちょっとマニアックな奴というのがあったんで、だから必然的にはじめて必然的にサッカーをするようになって、で今に至ります。」

こうした発言は、インタビューを行った他の在日朝鮮人Jリーガーからもなされた。

ところで、大阪朝鮮高級高校は、2005年度の日本高校サッカー選手権大会で、全国ベスト8に進出した。彼らの活躍について尋ねると、金は次のように述べた。

「すごい喜びに満ち溢れていましたね、あの時は涙でましたもん、本当に。自分のJリーグ入りがちよっとかすむって面がありましたけど、やっぱり同じ在日としてあれだけ日本の全国のサッカー界に名を轟かせて印象的じゃないですか。そういうので、そういうことをしたらやっぱり、自然と在日の全国の、大阪だけにとどまらず、在日、北は北海道から南は沖縄まで在日同胞たちがすごい喜ぶじゃないですか。そういうので活気が満ち溢れるので、そういうきっかけになると思うので、きっかけになっているんですよ。大阪朝鮮学校が活躍するっているのが、だから大きな偉業を成し遂げたと思います、大阪の朝鮮は。」

金は、在日の高校チームが日本で活躍することで、全国の在日同胞が応援し、在日社会が活気づくことを大いに評価していた。もちろん、ここでの在日同胞とは、韓国籍か朝鮮籍か、北朝鮮を政治的に支持するかどうかなどを超越した、民族的出自が等しく大阪朝鮮学校サッカー部にアイデンティティを抱く人々の集団である。こうした発言から、金は在日朝鮮人の一員という民族意識を強く持っていることがわかる。

1-4) 朝鮮学校と日本学校にみるサッカー文化の違い

金は、小学生から大学まで朝鮮学校でサッカーを続けてきたことから、プロチームで初めて日本人のチームに入りサッカーを行うことになった。朝鮮学校と日本学校のサッカー文化の違いについて尋ねると、金は「精神面が長けているのが朝鮮学校で、技術面が長けているのが日本学校という感じです」と答えた。つまり、日本の学校は、Jリーグクラブ傘下のユースチームのように指導者の質も高く、サッカーを行う環境面が充実している。一方で、朝鮮学校では、指導者の質もそれほどでもなく、人数も少ないが、しごきなどの過剰なトレーニングを通して選手が精神的に強くなる。そうするために、日本人には負けるなというようなことを教員から言われてきたかについて尋ねた。

「ありましたね。やっぱ、戦後から残っている面が多いですね。僕たちの、まあ高校くらいになったらそういうのはないですけど、でも時折、お前ら絶対日本人には負けるなみたいな、そういうのはありました。そういうので練習中とかも、おまえらそれじゃ勝てねえぞ、日本学校にみたいな感じで、そんなことやってちゃ、絶対日本人に根性でも、根性でも勝てない、絶対勝てないとか言われていました。」

在日朝鮮人は、家庭のなかで日本人には絶対に負けるなという教育を受けてきたといわれる（金村，2004）が、学校教育のなかでも同じような状況が確認された。金は、プロになって初めて日本人のサッカーチームに所属するなかで、何らかの違和感を抱くことはなかったのだろうか。

「うーん、どうですかね。すごいありましたね。たとえば、あの、まずサッカーの質の違い、今までは朝鮮大学校でやって来たのはすごい根性だったり、走りにすごい重点を置いてトレーニングしてきたんですけど、こっちに来たら技術面っていうのをすごい教えられるし、それはすごいためになりますし。まあ文化的な違いというのは特にありませんね。」

金は朝鮮大学校とプロの練習内容の違いを経験する一方で、これまで日本社会で生活してきたことから、特別に文化的な違いを体験することがなかった。在日と日本人選手の間にあるプレースタイルの違いについて尋ねた。

「でも在日朝鮮人の中でもそういうプレースタイルっていうのもいっぱいあるんで、どっちかという根性に偏りがちで技術がおぼつかないというのが多いですね、朝鮮学校出の人は。」

金は、自分も含めて在日の選手が技術はそれほどでもないが、体力があり根性で食らいつく泥臭いサッカーをするという認識をしていた。

1-5) 在日朝鮮人としての民族意識

金は、小学校の5・6年生頃、在日であることを初めて意識しはじめ、日本人に生まれてくれば楽だったと思っていた。現在の金は、在日朝鮮人であることをどのように捉えているのだろうか。

「もう誇りだけで生きてるようなもんですからね、僕は。（・・中略・・）僕の場合は、僕がプロ入りすることによって、この全国の在日の人たちが注目するし、その人たちが応援してくれる訳ですよ。そういうのをプレッシャーとも捉えられるし、でもそれが逆にいえばすごい力になるじゃないですか。だから逆に朝鮮人、在日朝鮮人に生まれてきて良かった。こういう成功、まあ一つの成功じゃないですか、これも。そういう得たことによって喜びがもう他の人と格段に違う訳ですよ。（・・中略・・）成功をつかんだ時に周りの反応とか。ああ、在日朝鮮人でよかったとみたいなの。本当に誇りに思っています。」

金は、Jリーガーになった時に、家族や親戚だけではなく、全国の在日同胞が応援してくれることが、励みと

なり、在日朝鮮人に生まれてきて良かったと実感していた。また、金はマイノリティである在日朝鮮人として生まれてきたことを否定的に捉えるのではなく、「少数派ということはすごく結束しやすい、だからみんな一つにまとまっている」というように肯定的に捉えていた。さらに、在日としての民族意識がサッカー選手として成長する上で影響したかと尋ねると、次のように述べた。

「相当影響しましたね、僕の場合は。背負っているものが違うんで、僕の挙手一投足に注目する人っていうのはすごい一杯いるし、僕を応援する人っていうのは一杯いるんで、その人たちのために、自分のためじゃなく、その人たちのために今までずっとやってきたんで高校から。（・・中略・・）高校とかなって、日本学校と戦いはじめて、そういう自分たちが勝つことによって、在日の人たちに力と勇気を分け与えるみたいなの。そういうのを先生たちに言われてきて、ああそうなんだみたいなの。まあ影響を受けやすい年頃ですし、そういう、そのために自分の、もちろん自分のチームのために、それと在日朝鮮人全ての人のために。僕たちが活躍してやってくんだっていうのを信念をもってやってたんで、それが今につながっています。」

金は、活躍を通して在日同胞社会を活気づけることに意義を見出していた。特に、こうした考え方が朝鮮高級学校時代の部活動において、教員の助言を受けて形成されたことは注目される。また、金の両親は、厳格な在日コリアンであったことから、礼儀や挨拶に関して厳しく躾けられたと語っていた。したがって、金の民族意識は、民族学校での教育や親からの躾を通して形成されたと考えられる。

金は、筆者とのインタビュー後にJリーグでも活躍し、北朝鮮代表にも選ばれた。したがって、筆者とのインタビューでは、北朝鮮代表での経験について聞くことはできなかった。しかし、ジャーナリストの慎（2010）の著書で、チーム戦術の違いや代表チームでの待遇の問題に関して、北朝鮮代表への不満を次のように述べている。

「・・朝鮮代表に行ったからといって、チームがオレに何かしてくれるわけじゃないし、めちゃくちゃ報酬をもらえるわけでもない。別に金がほしかったわけじゃないですよ。金が欲しいなら、Jリーグに出場したほうが出場給とか勝利給とか稼げるわけですから。そのJリーグで一生懸命結果を残して代表に行っても、パスは回ってこないし、楽しいサッカーもできない。それどころか移動や連戦でコンディション調整が難しくなり、Jリーグでもスタメン落ちしたりする。そんな悪循環を繰り返していたから、オレのなかで代表がウザい存在になりつつあった。」

(慎, 2010: 56頁)

北朝鮮代表のサッカーは守備的であり、金のフォワードとしての決定力を十分に生かしきれないスタイルであった。金は、次第に北朝鮮代表の待遇の悪さやプレースタイルの違いから、北朝鮮代表への不満を募らせていった。しかし、金は最終的にワールドカップ・南アフリカ大会に出場した。それは、高校のサッカー指導者や家族の助言を受け、考えを改めたからであった。

以上のことから、金は北朝鮮代表チームに選ばれることに誇りを持ちながら、それが絶対的なものではないことがわかる。金は、祖国と母国に関する感覚を次のように述べている。

「心の故郷は間違いなくウリナラ¹³⁾です。でも、だからといってウリナラに帰れと言われても帰りたくないし、こういうことを言ったら怒られるかもしれないけど、住めないと思う。それが韓国でも同じです。綺麗事抜きに、やっぱり一番暮らしやすいのは生まれ育った日本だし、家族がいるのも日本だから、これからもこの国でオレは生きていくと思う。でも、オレの母国は日本じゃない。日本の中にもうひとつの国があるんですよ。それが“在日”という国。朝鮮でも、韓国でも、日本でもない“在日”という国が、オレにとっても母国なのかもしれない。そして、その在日という存在を、広く世に発信するのが、オレのテーマじゃないかと思う。」(慎, 2010: 67頁)

金は、祖国である北朝鮮と韓国よりも、日本の中にある「在日という国」が母国であると述べていた。在日朝鮮人のサッカー選手は、日本の学校や日本代表チームと対戦することで、自分たちが日本に生まれ育った在日であることを強烈に訴えかけることができる。日本代表との試合で活躍することで、在日朝鮮人の存在が注目を集める。そこに在日Jリーガーの存在意義を見出そうとしている。慎(2010)は、1980年代後半から90年代初頭に、北朝鮮代表チームで活躍した在日の金鍾成の話を用いた後で、「日本でマイノリティーとして生きる在日コリアンにとって、日本戦はその民族的アイデンティティを確かめ実感できる機会」(32頁)であると指摘している。

また金に民族に関して悩んだことはありますか、という質問をすると、次のように答えた。

「僕の場合ですね。いや、僕は特にはないですね。朝鮮学校で、まわりは朝鮮人がいて当り前の環境だったので、もう大学に来たらある程度自己は確立されるし、アイデンティティに対してもすごく意識し始めるし、そういうアイデンティティ、民族性の誇りとかも持ち始めるんで、こういう日本人だけの環境に入ってきて逆にならぬにネタにしたり、そういうのをできてるんで。特に悩んだことはないです。」

金は、子どもの頃から朝鮮学校に通い、同じ在日コリアンと生活してきたことから、日本の学校に通った在日コリアンのように民族に関する葛藤を経験していなかった。彼は朝鮮学校の教育を通して民族の誇りを強く保持していた。

2-1) 事例2 白 泰栄

白泰栄は1982年に大阪府で生まれた在日三世である。聞き取りの時点(2006年8月)で、24歳であった。白の祖父母は植民地時代に現在の韓国に位置する地域から日本に渡ってきたという。渡日の経緯などはよく知らず、韓国にいる親戚とは会ったことがなかった。国籍は朝鮮籍で、小学校から高校まで朝鮮学校に通った。白は、大阪朝鮮高級学校が大阪府予選を勝ち抜き、インターハイに初出場した時の主力選手であった。その後、Jリーグでプロ選手になることを目標として関西の「強豪大学」にスポーツ推薦で進学した。大学時代は、関西大学リーグで輝かしい実績を残した。大学卒業後、2004年にJ2のチームと契約を交わしプロサッカー選手になった。白は第四回東アジア大会(2005)に出場した北朝鮮代表チームに初選出された。

2-2) 朝鮮学校でのサッカー経験

白は高校まで朝鮮学校で過ごしたことから、幼稚園の頃から「遊ぶといたらサッカーという感じ」で蹴球に親しんできた。在日朝鮮人の男にとって、サッカーをプレーすることは当たり前の経験であった。

「まあやっぱり、国技がサッカーというのもあるし、まあやっぱり、全国小学生の大会とかもサッカーあるんで、特に子どもたちは、男の子はサッカー、女の子は朝鮮舞踊が基本になっていると思いますけど。」

白が述べたように、朝鮮学校では、男子生徒がサッカーをプレーし、女子生徒が民族舞踊を習うという習慣があるようだ(ウリハッキョをつづる会, 2001)。さらに、サッカーは北朝鮮と韓国の国民によって「国技」として認識されていることから、在日コリアンにとっても「特別なスポーツ」になっている。白は朝鮮学校で在日朝鮮人の友達とともに快適な生活を送っていた。白が高校三年生の時に大阪朝鮮高級学校は、はじめてインターハイに出場した。小学校と中学校の大阪大会でも優勝しており、その時のメンバーがそのまま大阪朝鮮高級学校に進学し、同じ世代にサッカー好きで上手な選手が集まっていた。当時の新聞でも大阪朝鮮の活躍は取り上げられており、在日同胞や同窓生からたくさんの激励を受けていた。白は当時から在日社会の代表という使命感を持ってプレーしていたのだろうか。

「その当時は、そういうのはなかったんですけど、まあやっぱり、自分らがやっぱり朝高で貢献できるのは

当然サッカーしかないなあとは思っていたし、それは今も変わらないですけど。うーん、でもやっぱり、大阪だけではなく全国の同胞たちからいろいろな喜びのメッセージとかもいただいたし、まあ、そのときに自分はサッカーでこういう同胞の社会に貢献したいなあというのは思いました。』

白は、高校時代にはそれほど在日社会のために頑張るという使命感を持っていた訳ではなかったが、全国大会に出場することで、全国の在日同胞から応援を受け、そのことでサッカーで在日社会に貢献したいという気持ちが形成されていた。2006年に母校の大阪朝鮮高級学校が選手権大会で全国ベスト8に進出した時、白は応援に駆けつけた。多くの人に応援してもらえる後輩を羨ましいと述べ、自分も在日同胞の応援を受けていることを再認識したと語った。

2-3) 在日としての民族意識

白は子どもの頃から朝鮮学校で過ごし、基本的に本名で生活してきた。自分が在日朝鮮人であることを意識するようになったのは小学生の頃であった。この頃、近所の日本人から嫌がらせを受けていた時期があり、日本人との違いについて考えるようになった。白の場合、どのように呼ばれることが自分の民族に関する感覚に近いのだろうか。

「うーん、難しいですね。まあ僕は朝鮮人ですし、まあ在日でもあるんで、うーん、そんなに変わりはないと思うんですけど。うーんやっぱり、ちょっとこういう日本社会でずっと生きていくと、やっぱり自分が在日という意識がやっぱりだんだん薄れはじめる危険性はあると思うので、やっぱりどうにかそれは防ぎたいというのはあります。」

白は、「朝鮮人」や「在日」という呼び名が一番自分の感覚に合っていると捉えていた。こうした感覚は、朝鮮学校で育った在日朝鮮人にとって共通する感覚であろう。また日本社会で生活するなかで、日本人に埋没してしまう危険を認識しており、自らの民族性を守りたいという意識を持っていた。在日コリアンの9割近くの人が本名以外に日本式の苗字である通名を持っているとされ、日本社会での差別を避けるために通名を使い分ける者もいるといわれる(福岡, 1993)。また在日コリアンも三世・四世となるにつれて、朝鮮語の読み書きができない層も出てきており、実質的に日本人と在日コリアンの違いが見えにくくなってきたという指摘もある(尹, 2001)。

ある在日の研究者は、ほとんどの在日コリアンが日本に永住することから、日本国籍を取得し「コリアン・ジャパニーズ」として日本社会に自らの立場を主張すべきだという考えを述べている(鄭, 2001)。こうした考

えについて白の意見を聞いた。

「まあ僕は日本に変える気はまったく、国籍を変えることはまったくないですし、僕は在日として、まあこれからも生活していきたいと思うし、自分の子どもたち、自分が子どもを持ったときには、同様に子どもたちにも在日として生きていってほしいというのはありますけど。」

白は日本国籍を取得することを全く考えておらず、日本社会で自らの権利を主張するのではなく、朝鮮籍を保持して在日朝鮮人として生きていくという考えであった。

2-4) 北朝鮮代表チームでの経験

白は大学時代に北朝鮮代表に呼ばれたが、その時は一度辞退した。その理由を次のように語っている。

「そのときちょうど2002年の日韓ワールドカップがあって、韓国が大躍進していて、まあやっぱ、テレビでそういう韓国チームの活躍を見ていると、やっぱ韓国の代表っていいなという憧れも持ったし、まあサッカー選手である以上、そういうチャンスがあるほうが良いかなと思って、当時、あの朝鮮のサッカー事情はまったく情報がなかったんで、次の2006年のワールドカップ予選にでるかかっていうのも全くわからなかったし、そういう状況を考えると、韓国代表を目指していこうかなという思いもあって、そのときは辞退しました。」

白は韓国代表への憧れをもっていたことから、北朝鮮代表を辞退していた。白は北朝鮮代表よりも、ワールドカップで大躍進した韓国代表に入ることを考えていた。白は「やっぱり大きな舞台にでられる可能性のあるチームでやりたいというのは、まあサッカー選手なら誰でも思う」と述べていた。こうした考えの揺らぎは、総聯系の在日同胞社会に貢献するために、北朝鮮代表を目指すという意識ではなく、サッカー選手としての成功を優先する考え方に基づくと考えられる。

白は、2003年に同じ在日朝鮮人の安英学と李漢宰が北朝鮮代表でプレーする試合を見て、初めて代表チームの競技レベルを知ることができ、北朝鮮代表への気持ちが強くなった。白は、マカオで開催された第四回東アジア競技大会(2005)に出場した北朝鮮代表チームではじめてプレーした。在日同胞の知り合いが白のビデオを、北朝鮮のサッカー関係者に送ったことが代表選出につながったのではないかと話していた。しかし、はじめて北朝鮮代表チームに合流した時に、白は当初、うまくチームに溶け込めなかった。

「うーん、そうですね。やっぱり最初はやっぱり、あっちの人は言葉を喋るのがすごく早くて、なかなか

最初聞き取るのが難しい部分もあって、うーん、最初の二・三日は苦勞したんですけど、まあ、一緒にボールを蹴って練習する時間が長くなればなるほど、お互いに少しずつ理解してきて、本当に最後帰るときにはみんなで仲良くなっていました。」

白は朝鮮学校で朝鮮語を学習していたが、彼の話す言葉は北朝鮮の選手に理解されず、彼も選手たちが話す朝鮮語を理解できなかった。そのため、彼らと代表チームに適應するために多くの時間を要した。白は、北朝鮮の選手の印象を技術的には発展段階にあると述べる一方で、身体能力が高いと評価していた。選手間の上下関係は、年下の選手がボール運びをするという程度で、それほど厳しくなく、日本のチームと変わらないと話していた。

2-5) 在日サッカー選手の「優越性」

在日朝鮮人のサッカー選手は、日本人に比べて相対的に人数が少なく不利な条件のなかで、なぜ優秀な選手を輩出することができたのだろうか。白はその根拠を次のように説明した。

「まあやっぱり一つは、身体的に優れた部分はあると思いますし、まあ、先ほど話された通り、小さい時から、まあ、日本人には負けるな、という教えもありながらサッカーをしてきたというのもあって、まあそういう気持ちの部分は優れているとは思いますがね。」

白は身体的な優越性と精神的な強さから、在日の活躍を説明した。特に、小学生時代に周りの大人から、日本人には負けるな、ということをよく言われていた。ただ、白はサッカー選手としては日本人とか在日とか関係なしに誰にも負けないという気持ちでやっていると述べた。しかし、白にとっても、在日としての民族意識がサッカー選手としての成長を後押ししたようだ。

「うーん、まあやっぱり、[Jリーグの] 試合になっても、まあ観客を見回したときに、まあ僕の名前を、在日朝鮮人でハングルで書かれた、あの応援団幕とか、そういうのを持って応援してくれる人たちを見ると、うーんまあ、そういう気持ち、在日として本当に頑張らなければならないという気持ちは一層強くなる部分はあると思いますけど。」

白は、自発的に在日のために頑張ろうと考えたのではなく、周りの在日同胞の熱心な応援を受けて、民族意識を強化していったようだ。

2-6) 誹謗中傷された経験

白は北朝鮮代表に選出され、Jクラブのある地元メディアからも大きく取り上げられた。そうした中で、メディアではなくサポーターから誹謗中傷されたことがあ

る。

「いやメディアは本当に、こっちのメディアは特に、喜んでくれたというのはありましたけれど、まあ、一つショックだったのは、あっち、大会が終わってこっちに帰ってきた時に、まあサポーターの方にちょっと、えーひどい屈辱的な、というか侮辱的な発言を受けたのは、ちょっとショックでしたね。」

こうした事件が起こる背景には、拉致問題に関するメディア報道も影響していたようである。

「そうですね。ちょうどその時に拉致問題に関して、すごい連日報道してたし、まあ、そういうのを日本の方たちは見てるんで、まあ、そういう問題に関してちょっと僕の方に何かいう人がいて、まあ、その時すごい怒りもありましたし、まあショックでした。」

サポーターからの差別的な発言は、白が北朝鮮代表に選出されてから始まったことで、2010年の5月にも、浦和レッズのサポーターから差別発言があり問題になった。白はこの件以外で日常生活のなかで、差別を受けたことはないと話していた。

IV. Jリーグにみる在日三世の民族意識の比較

在日朝鮮人のプロサッカー選手は、朝鮮高級学校・プロ・北朝鮮代表のチームでプレーするなかで、在日同胞の代表として応援を受けることがある¹⁴⁾。したがって、他の在日朝鮮人よりも、学校や国の代表として周りの人々から期待をかけられることが多く、確固たる民族意識を形成している可能性がある。2名の回答者は、朝鮮学校で民族教育を受けており、在日朝鮮人としての民族意識を保持していた。

金は朝鮮大学の卒業生であり、インタビュー回答者のなかで最も強く民族の誇りについて話してくれた。白は、金ほど強く民族の誇りについて表明した訳ではなかったが、在日朝鮮人としての民族意識を形成していた。調査対象者は、通名をほとんど使っておらず、民族名のみを本名と認識しており、日本国籍の取得を全く考えていなかった。むしろ、子どもの頃から民族名で同じ在日朝鮮人と過ごし、民族教育を受けており、在日であることに誇りを持っていた。こうした回答は、福岡が分類した「祖国志向型」の特徴に一致する(福岡, 1993)。金と白は、在日朝鮮人としての民族意識を持ち、北朝鮮代表選手としてプレーすることで在日同胞を勇気づけたいという思いを持っていた。しかし、彼らは日本で生まれ育ち、家族も日本に住んでおり、北朝鮮に帰還することは考えていなかった。Jリーグで活躍することを通して日本のサッカー界から認められ、日本人の友人を持つようになり、Jリーグの競技環境に満足していた。さらに、

彼らはともに大学を卒業しており、相対的に学歴の水準が高かった。したがって、「祖国志向型」の特徴に一致する部分もありながら、個人的な成功を追求する「個人志向型」としても分類できる。

在日朝鮮人に限らず、プロサッカー選手は、国家代表チームでプレーすることを目標にしていることが多い。サッカーのワールドカップは、世界最高レベルの大会といわれ、多くのサッカー選手にとって夢の舞台である。ここでは、国家代表チームへの帰属意識に焦点をあてる。

「サッカーの日韓戦を見るときにどちらを応援しますか」と質問すると、当然のことながら、白と金は韓国を応援すると答えた。両者は、実際に北朝鮮代表として国際試合に出場しており、代表チームに選抜されたことを大変名誉なことと捉えていた。

金は総聯系の在日社会のために貢献したいと考えており、韓国代表ではなく北朝鮮代表に在日同胞の代表として選出されることに意義を見出していた。さらに金は、大学進学時においても日本の大学から勧誘を受けていたが、朝鮮大学校からプロ選手になることに意義があると考え、朝鮮学校を選択していた。一方で、白はプロ選手になる可能性の高い関西の「サッカー強豪大学」に進学していた。

こうした回答から、金と白では、代表チームに対する帰属意識の面で違いがあることがわかる。金は在日同胞のために北朝鮮代表で活躍したいと考える一方で、白はワールドカップに出場できる可能性の高い韓国代表でも構わないという意識を持っていた。さらに、白の語り口は、金昌守とは対照的であった。金は、在日同胞のために主体的に頑張る、在日社会に貢献したいという強い使命感を表現した。一方で、白には在日朝鮮人の応援を受けているから頑張らないといけないという受け身の感覚が見受けられた。二人とも北朝鮮代表としてプレーしたが、選抜した大学や在日朝鮮人としての民族意識には大きな違いが確認された。

これまで見てきたように、在日朝鮮人のサッカー選手といっても、民族意識は決して一枚岩ではなく、家庭環境や民族学校での経験に応じて異なることが示唆された。こうした意識の違いは、在日若者世代の多様なアイデンティティを反映している（福岡，1993）。

以上のことから、本研究では、金と白の民族意識を福岡の類型枠組みにあてはめて、「祖国志向型」と「個人志向型」に分類した。しかし、白は、韓国代表でも構わないという考えを持っており、総聯系の在日社会に貢献するために北朝鮮代表しか考えられないという認識の金とは異なる民族意識を持っていた。さらに、金でさえ、日本代表の充実した競技環境を羨ましく思い、北朝鮮代表での活動を負担に感じたように、代表チームに対する思いには揺らぎが見受けられた。つまり、在日朝鮮人Jリーガーの立場や時代背景も変化してきており、福岡の類型枠組みに完全に一致しきれない者がでてきている。たとえば、日本代表の李忠成の場合には、日本国籍を取

得したという点で「帰化志向型」に分類できるかもしれないが、「李」という名字を保ち、読み方だけ日本風に変えた時点で、在日コリアンとしての出自を変えたくないという思いが見受けられる。サッカー選手としての成功を求めて日本国籍を取得したことから、「個人志向型」と分類することもできる。このように、現実の在日Jリーガーは、福岡の類型枠組みを越えて、多様な民族意識を形成していると考えられる。

V. 結 論

本研究は、在日朝鮮人のプロサッカー選手という特殊な職業に就く人々の民族意識に焦点を絞った。特に、一般の在日朝鮮人と違って、プロのサッカー選手は、国家代表チームの選手として、ある種国を背負って戦う機会があるだけに、周りの人々からの期待も高く、国家に対する帰属意識を強く意識せざるを得ない。ワールドカップ南アフリカ大会で国歌斉唱の時に、涙を流した鄭大世は、韓国や日本のメディアから大きく報道され、あたかも「民族主義者」や「愛国者」として表象された。しかし、本研究の結果が示すように、国家代表チームに選抜された選手といえども、白選手のように、韓国代表でも構わないという意識を持っていた。さらに、同じ在日朝鮮人のサッカー選手といっても、学校教育の内容、親の民族意識などによって、異なる国家代表チームを目指す場合がある。特に、2名の対象者は、福岡の類型枠組みの「祖国志向型」と「個人志向型」に分類された。しかし、この分類は、強いてあてはめればあてはまるという程度であり、2名の対象者間でも、在日朝鮮人としての民族意識、北朝鮮代表チームへの忠誠心、政治的な思想に関して違いが見受けられた。つまり、本研究で対象にした在日Jリーガーは、福岡の類型枠組みが示す多様性を越えて複雑な民族意識を形成してきたと指摘することができる。

また2名の対象者は、朝鮮学校で男がサッカーをプレーすることは当然の経験であると述べた。さらに、サッカーは北朝鮮と韓国の両国にとって「国技」であり、在日朝鮮人の特別なスポーツであることを指摘した。在日にとって、(プレーと観戦を含む)サッカー経験は、単なるスポーツ活動という枠を越えて、在日コリアンとしての民族意識を再確認・強化する役割を果たしていることが示唆された。

一方で、日本の学校に通った在日コリアンについて十分に調査をすることができなかった。今後、日本の学校に通ったマイノリティのサッカー選手の民族意識について調査を進める必要があるだろう。サッカーは、在日コリアンの民族意識を再確認する場として重要な役割を果たしている。総聯系のサッカー選手は、北朝鮮代表として在日同胞の期待を一身に体現する立場にある。一方で、韓国や日本代表チームに選出される在日コリアンは、在日若者世代の多様な民族意識を反映している。

つまり、生まれた時から日本で生活し、日本人との感覚がそれほど変わらなくなった在日三世や四世の世代にとって、ワールドカップという世界最高の舞台に立てるならば、日本代表でも韓国代表でも構わないと考える選手も出てきたということである。白はまさに韓国代表でも北朝鮮代表でも構わないという考えであり、競技者としての成功を重視していた。このようなアスリートは他のスポーツ種目でも増えてきている。

こうした選手の出現は、グローバル化の影響を受けて、国民意識の希薄化と競技者としての自己実現を重視する傾向を表している。「越境スポーツ選手」(千葉, 2002)と呼ばれる競技者は、今後さらに増えることが予測され、ナショナル・アイデンティティや民族意識よりも、「アスリート・アイデンティティ」とでも呼ぶべき競技者意識を重視する選手が目されるに違いない。

付 記

本研究は、2003年度のトヨタ財団研究助成Aを受領して行われました。またインタビュー調査に答えていただいた選手、匿名の査読者の先生、ステイブ・ジャクソン氏に対して、研究への協力を深く感謝します。

VI. 参考文献

- Andrews, D. (1996) Deconstructing Michael Jordan: Reconstructing Postindustrial America, *Sociology of Sport Journal*, 13, pp. 315-318.
- Archetti, Eduardo, P. (1994) Masculinity and football: the formation of national identity in Argentina. In Giulianotti, R and Williams, J. (Eds.) *Game without frontiers: football, identity and modernity*. Aldershot: Arena, p.225-243.
- 有元健 (2005) 序章 サッカーの詩学と政治学. 有元健・小笠原博毅編 *サッカーの詩学と政治学*. 人文書院: 京都, pp.7-37.
- 有元健・小笠原博毅編 (2005) *サッカーの詩学と政治学*. 人文書院: 京都.
- Bale, J., and Maguire, J., eds (1994) *The Global Sports Arena: Athletic Talent Migration in an Interdependent World*. London: Frank Cass.
- ブルーマー, H.; 後藤将之訳 (1991) *シンボリック相互作用論*. 勁草書房: 東京.
- 鄭大均 (2001) *在日韓国人の終焉*. 文春新書: 東京.
- 崔仁和 (2002) *AWAYに生まれて-在日のサッカー選手・朴康造の挑戦*. 集英社: 東京.
- 千葉直樹 (2002) *越境スポーツ選手に関する研究*. 中京大学博士学位請求論文.
- Darby, P. (2007) Gaelic Games, Ethnic Identity and Irish Nationalism in New York City, *Sport in Society*, 10/3: pp.347-368.
- デimeo: 小笠原博毅 訳 (2005) *インドサッカーの問題と展望*. 有元健・小笠原博毅編, *サッカーの詩学と政治学*. 人文書院: 京都, pp.131-140.
- 黄順姫 (2007) 2006年ワールドカップサッカー・多文化・ディアスポラ, 国際交流委員会主催国際シンポジウム「アジアにおけるグローバリゼーションとスポーツ」, 『日本スポーツ社会学会第16回大会抄録集』, pp.116-117.
- Frogner, E. (1985) On ethnic sport among Turkish migrants in the Federal Republic of Germany. *International Review for the Sociology of Sport*, Vol. 20, 1/2: 75-86.
- 福岡安則 (1993) *在日韓国・朝鮮人*. 中公新書: 東京.
- 福岡安則・金明秀 (1997) *在日韓国人青年の生活と意識*. 東京大学出版会: 東京.
- 原尻英樹 (1997) *日本定住コリアンの日常と生活-文化人類学アプローチ*. 明石書店: 東京.
- Hutnik, N. (1986) Patterns of Ethnic Minority Identification and Modes of Social Adaptation. *Ethnic and Racial Studies*, 9(2): 150-167.
- Jackson, S. J. (1998) 'A Twist of Race: Ben Johnson and The Canadian Crisis of Racial and National Identity', *Sociology of Sport Journal* 15: 21-40.
- 加部究 (2008) *忠成-生まれ育った日本のために*. ゴマブックス株式会社: 東京.
- 金山幸司 (2001) 外国人登録法上の国籍, 木棚照一監修, 『第二版「在日」の家族法Q & A』日本評論社: 東京: 74-77.
- 金村義明 (2004) *在日魂*. 講談社文庫: 東京.
- 康熙奉 (2001) *在日はなぜスポーツに強いのか*. ベスト新書: 東京.
- 金泰泳 (1999) *アイデンティティ・ポリティクスを超えて-在日朝鮮人のエスニシティ*. 世界思想社: 京都.
- Lanfranchi, P., and Taylor, M. (2001) *Moving with the ball: The migration of professional footballers*. Oxford /New York: Berg.
- 日刊スポーツ社編 (2006) *Jリーグ・プレーヤーズ名鑑*. 日刊スポーツ社: 東京.
- 野村進 (1996) *コリアン世界の旅*. 講談社: 東京.
- 朴一 (2005) 「在日コリアン」ってなんでんねん?. 講談社+α新書: 東京.
- 慎武宏 (2010) *祖国と母国とフットボール~ザイニチ・サッカー・アイデンティティ*. 武田ランダムハウスジャパン: 東京.
- 鈴木文明 (2008) *在日朝鮮人女性とスポーツの記憶-一世のハルモニ達のライフストーリーから-*. 『日本スポーツ社会学会第17回大会発表抄録集』, pp. 46-47.
- Stead, D., and Maguire, J. (2000) 'Rite de Passage or Passage to Riches?: The Motivation and Objectives of Nordic / Scandinavian Players in English League

- Soccer', Journal of Sport and Social Issues 24(1):36-60.
- ウリハッキョをつづる会 (2001) 朝鮮学校ってどんなところ?. 社会評論社:東京.
- リャン, ソニア:中西恭子訳 (2005) コリアン・ディアスポラー-在日朝鮮人とアイデンティティ. 明石書店:東京.
- 桜井厚 (2002) インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方. せりか書房:東京.
- 矢野宏 (1995) 在日挑戦 朝鮮高級学校生インターハイへの道. 木場書館:東京.
- 尹健次 (2001) 「在日」を考える. 平凡社:東京, pp.320-321.

注

- 1) 在日四世の李忠成は、19歳以下の韓国代表合宿に召集されたが、韓国代表に選抜されなかった。その後、北京五輪での日本代表チームへの選出を考慮して、日本国籍を取得した。李は帰化とともに、名前の呼び名を「イ・チュンソン」から「り・ただなり」に変更した(加部, 2008)。
- 2) 韓国籍を持つ者を「在日韓国人」、朝鮮籍を持つ者を「在日朝鮮人」と国籍に応じて呼称を区別する場合がある。しかし、韓国籍を持つ者が必ずしも韓国を政治的に支持しているとも限らず、国籍に応じた呼称では在日の人々を適切に説明することはできない(康, 2001)。
- 3) 「サッカーの自己形成」とは、サッカーの発展過程と置き換えることができる表現である。つまり、サッカーが世界各国に普及する過程において、英国の植民地政策に利用されながら、サッカーは普及していったということである。
- 4) 本研究でインタビューの対象とした選手のなかには、後述するように、サポーターから民族に関する誹謗中傷を受けた者がいた。また何名かの選手は、高校や大学時代に日本人のチームと対戦した時に、「朝鮮に帰れ」や「キムチ臭い」などと悪口を言われたことがあると述べた。
- 5) 陸上競技3000m障害のサイフ・サイド・シャヒーンは、2003年8月にケニアからカタールに国籍を変更し、パリ世界選手権大会で金メダルを獲得した。2006年のアジア大会に向けてメダル有望な選手を勧誘していたカタール政府は、生涯にわたり毎月1000ドル(約12万円)の収入をシャヒーンに約束したといわれる(陸上競技マガジン, 2006年3月号)。また日本人でも、フィギュアスケート・ペアの川口悠子は、17歳の時にロシア人コーチに師事し、2008年にロシア国籍を取得し、バンクーバー五輪ではロシア代表選手として4位入賞を果たした。
- 6) 在日コリアンの所属する8球団にインタビュー調査の依頼を行い、4球団から許可を得ることができた。残りの4球団に所属する5名の選手は、サッカーに関係のない取材や、すでにメディアから取材を受けたことがあるという理由から、インタビュー調査の依頼を断った。
- 7) 桜井(2002)は、解釈的客観主義アプローチを「機能的な推論を基本としながら、語りを解釈し、ライフストーリー・インタビューを重ねることによって社会的現実を明らかにしようとするものである」(25頁)と説明している。
- 8) 朝鮮学校には、朝鮮籍のみならず韓国籍、日本国籍を持つ生徒さえいる。たとえば、慎(2010)は、最近の朝鮮学校の教育方針について次のように述べている。「かつては北朝鮮の社会主義体制を賛美する思想教育や、特定の個人を神格化する忠誠教育も施された朝鮮学校だが、近年はそういった偏った教育方針も影をひそめ、北でも南でもない『コリアン・アイデンティティ』の構築に力が注がれている。そうしたこともあって、『朝鮮』籍や『韓国』籍はもちろん、日本に帰化したものの民族的アイデンティティは保ち続けてほしいという両親の願いなどから『日本国籍』の在日コリアンも一部通学するようになった」(慎, 2010:38頁)。
- 9) 在日コリアンの先行研究では、「総聯系」と「民団系」という記述が目立つが、金昌守の場合にはインタビューの中で「北朝鮮系」という表現を多用した。
- 10) ワールドカップ・ドイツ大会のアジア地区最終予選で、日本代表チームは北朝鮮代表チームと2005年2月9日に埼玉スタジアムで対戦した。試合の結果は、2対1で日本代表が勝利を収めた。
- 11) 外国籍特別枠とは、1チーム3名以内と定めた外国人選手枠とは別に、日本の高校や大学を卒業した外国人に適用される枠である。Jリーグクラブは、外国人枠とは別に1チーム1名の外国籍特別枠の選手と契約することができる。
- 12) 在日朝鮮人のサッカー選手は、サッカーが朝鮮民主主義人民共和国の国技だと口をそろえる。ただ、「国技」とは、多くの場合、その国で人気スポーツであることから「国技」と呼ぶ場合が多い。日本の相撲が「国技」であるという言説と同じように、その根拠は曖昧なものであることを認識する必要があるだろう。
- 13) ウリナラとはわれわれの国という意味である。ここでは北朝鮮を意味する。
- 14) たとえば、在日朝鮮人蹴球協会のホームページ(<http://www.ksaj.gr.jp/index.html>)には朝鮮学校出身で北朝鮮代表に選ばれた選手の写真や経歴が「在日同胞選手一覧」として紹介されている。

〔平成23年3月31日 受付〕
〔平成23年8月18日 受理〕